



孤独に  
寄り添う

## 孤独に寄り添う

---

本は人生に影響なんて与えられない。幼い頃から、私はずっとそう思っていた。突飛な冒険譚に胸を躍らせても、崩壊した家族の再生に涙しても、現実の私は何も変わらない。相変わらず冴えなくて、世界を救うどころか、友達の喧嘩ひとつ止められないままだ。興奮や感動の余韻を残して、本は私を冷ややかな世界に放り出す。

思えば、私は恐らく、人生に影響を与えるような「ほんとうの読書」を知らなかった。「ほんとうの読書」は、誰にも言えずに隠していた気持ちを、作者にずばり言い当てられることだ。登場人物の心情に、深く共感することと言ってもいい。「ほんとうの読書」を経験すると、作者が、登場人物が、孤独だった自分の心に寄り添い、すぐ傍で息づいているように思える。そのことは、現実の世界では何の助けにもならないかもしれない。しかし、その共感は孤独の淵から、確かに人を救うのだ。

私は中学で「バッテリー（著：あさのあつこ）」を読み、初めて「ほんとうの読書」を知った。私にとってこの本が特別だったのは、端役の瑞垣がいたからだ。

この本のなかで、中学生たちはそれぞれに悩みながら、自分なりに野球と向き合おうとする。瑞垣はこの本で唯一の敗者だった。彼以外の登場人物は皆、野球をする意味を見失っても、上達しなくても怪我で復帰できなくなっても、好きな野球に食らいついてゆく。しかし、瑞垣だけは、結局野球を諦めることになる。幼馴染である門脇秀吾の栄光を、傍で見せつけられ続けるのに耐え切れなかったからだ。その時の独白が印象的だった。

秀吾さえいなかったら、野球が好きでいられたかもしれない。単純に、一途に、ボールを打って、楽しんでいたかもしれない。百万回唱えても何も変わらない。わかっているのに、やはり、眩いてしまう。もし、秀吾さえいなかったら。（バッテリーIV（角川文庫） 158頁）

おまけに、このおれは、野球をあきらめることも割り切ることもできずに、門脇の後ろ、横手の五番を打ったりしている。最悪最低。気が付いたら、もう十五だぜ。（バッテリーIV（角川文庫） 159頁）

痛々しくて、情けなくて、読んでいられないほどだった。本を読んで泣いたのはこれが初めてだ。

私も、長年続けた剣道に嫌気がさしていた頃だった。放課後から深夜まで、部活や地域の道場での練習に打ち込んでも、必ずどこかに越えられない相手がいた。道場で、長年トップを走り続ける女の子。部活の先輩。特に道場のトップの子には、とてもじゃないが勝てる気がしなかった。いちばんになれないなら、やってもやっても敗北感に打ちひしがれるなら、どうして私はいつまでもずるずる練習を続けるんだろう。無力感はじわじわと蓄積していたのだ。それを瑞垣に言い

当てられた。

気が付けば、私ももう十五歳になる。

自分でも持て余すような曖昧な憂鬱を、あさのあつこは見事にすくいあげ、言葉にした。私はそれに共感し、泣いたのだ。大丈夫、私だけではない。瑞垣が、もっと言えばあさのあつこが、私の気持ちを知ってくれている。そのことに救われた。

本によって救われる経験をしたことで、世界の見え方はまるっきり変わった。息を吸い込むたびに、なんだかどきどきするような気がしたのだ。この世界のどこかに、自分でさえつかみきれない自分の気持ちを、深く汲んでくれる人がいる。私は孤独じゃない。それに気が付いて、体が震えるほど嬉しかった。

その後、私は数々の「ほんとうの読書」を経て、人生に影響を与える本にもたくさん出会った。しかし、瑞垣のことは十九になった今でも、ことあるごとに思い出す。かつての私と同年で、同じ悩みに苦しんでいた得がたい仲間だ。彼を思うときはいつも、初恋の相手を思うように、くすぐったいような、痛いような寂しいような気持ちになる。

恥ずかしいからあまり言わないけれど、私はあの頃から、作家を目指して小説を書いている。かつての私が瑞垣に救われたように、いつか誰かの心に寄り添い、誰かを救えるような本を作りたい。

あの目の覚めるような読書の記憶と、翌日の様変わりしていた朝の風景を、自分の手で誰かに届けること。それは想像するだけでまぶしくて、目を細めてしまうような希望なのだ。

(了)